

一〇二六年二月一四日

路地親し雪解零のにぎはへり
雪景色まるく嵌めし円月橋
せせらぎの岩といふ岩雪帽子
梅林の眼下に靄る屋敷町
門前の出汁の匂ひや春の昼
堰落つる春水綺羅をまき散らし
春風に尾をなびかせるポニーかな
奥院へ足を伸ばせり梅日和
天領の末黒野雨に匂ひけり
池涸れて針山なせる蓮の骨
酒蔵の太きうつぱり春寒し
春の宮京の名酒の樽並ぶ
畦焼きや真直ぐ鎮守へ続く道

康子澄
むべ

吟行後日句会みのる選

一〇二六年二月一四日